

## 遼寧省文物考古研究所との友好共同研究10年と『東アジア考古学論叢』の刊行

奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所とが友好共同研究を開始してから、2005年でちょうど10年が経過したところです。1996年に「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究 - 三燕都城等出土の鉄器及びその他金属器の保存研究」として友好共同研究協定書を交わして着手したのが始まりでした。2001年にはそれまでの研究をさらに発展させるべく、「3 - 6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」の協定書を締結して、昨年度まで研究を継続してきました。今年度からは、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」という協定書を取り結び、新たな共同研究に取り組み始めました。

昨年度までは、特に三燕文化の文物について調査研究を実施してきました。三燕とは、遼寧省西部の朝陽地方を中心として4世紀中頃から5世紀中頃にかけて、慕容鮮卑<sup>ぼうようせん び</sup>という部族が建てた「前燕」「後燕」「北燕」の三国を合わせた呼称です。朝陽市にはこれらの国の都が置かれた「竜城」跡があります。この時期にこの部族が残した文物を主として三燕文化と呼んでいます。この時期はちょうど日本の古墳時代に相当し、韓半島との関連性とも相まって、近年資料の増加著しい三燕文化文物は日本の古墳時代研究者の関心を集め、重要視されるようになってきました。こうしたなかで、2002年には『三燕文物精粹』中国版を、2004年度には同書の日本語版を共同研究の成果として公刊することができました。この図録には北燕の「馮素弗墓」<sup>ひょうそふつ</sup>や一大墓葬群で著名な「喇嘛洞墓地」<sup>ら ま どう</sup>などの重要な文物の図版が収められており、国内外の研究者から注目されています。

共同研究は主として、瀋陽市にある遼寧省文物考古研究所の一室をお借りし、出土品を実際に手にとって観察をおこない、実測して記録するという地道な考古学的調査を積み重ねてきました。出土品の写真撮影は膨大な量にのぼりますが、文物考古研究所の撮影室で奈文研と文物考古研究所の両研究所のカメラマンが協力しておこなってきました。調査対象となった出土品は、北票喇嘛洞墓地出土品をはじめとして、北票房身墓、十二台郷磚廠88M1、朝陽袁台子壁画墓、朝陽後燕崔邁墓、北票北燕馮素弗墓な

ど特に重要な墓葬のほか、北票倉糧窖墓、奉車都尉墓、甜草溝晋墓など多数に及んでいます。調査の進捗に伴い、文物考古研究所以外に所蔵されている出土品について調査が必要となり、それを研究所まで運んでいただくなど、関係する各機関のご協力もいただきました。考古学的な調査のほかに、蛍光X線分析などの理化学的調査を実施して材質鑑定や装飾技法の解明などを進めてきました。

こうした調査と並行して、文物考古研究所の研究者をはじめとして省や地方の文化庁など文化財関係機関の方々を日本に招聘して、各地の遺跡や遺物など、多数の文化財や発掘調査の現場などを参観し、我が国の文化財の調査研究、保存、活用の実態に接していただきました。中国の研究者の方々は、文物考古研究所で私たちの考古学的調査や写真撮影を通じて、日本的な調査方法の一端に触れていましたが、日本での実態を目の当たりにして、日本の考古学研究や発掘調査、文化財の保存、大規模遺跡の保護・活用などについてさらに理解を深めていただきました。また、招聘の際には、奈文研などで講演をお願いし、第一線の研究成果をご紹介いただきました。

こうした長年にわたる友好共同研究の成果の一端として、今年3月に『東アジア考古学論叢』を公刊しました。三燕文化を主軸として東アジア全体に視野を広げた、日中双方の研究者による共同研究論文集です。これも先の『三燕文物精粹』と同様に、研究者の注目するところとなっています。この論文集の刊行は、10年間の共同研究に一区切りをつけ、新たな段階へと発展させる礎を築いたことの象徴と言えるでしょう。今後はさらに友好学術交流を深め、隋唐代研究に資するべくこの共同研究を進めていこうと思っています。（都城発掘調査部 小池 伸彦）



遼寧省文物考古研究所での調査(2005年6月)